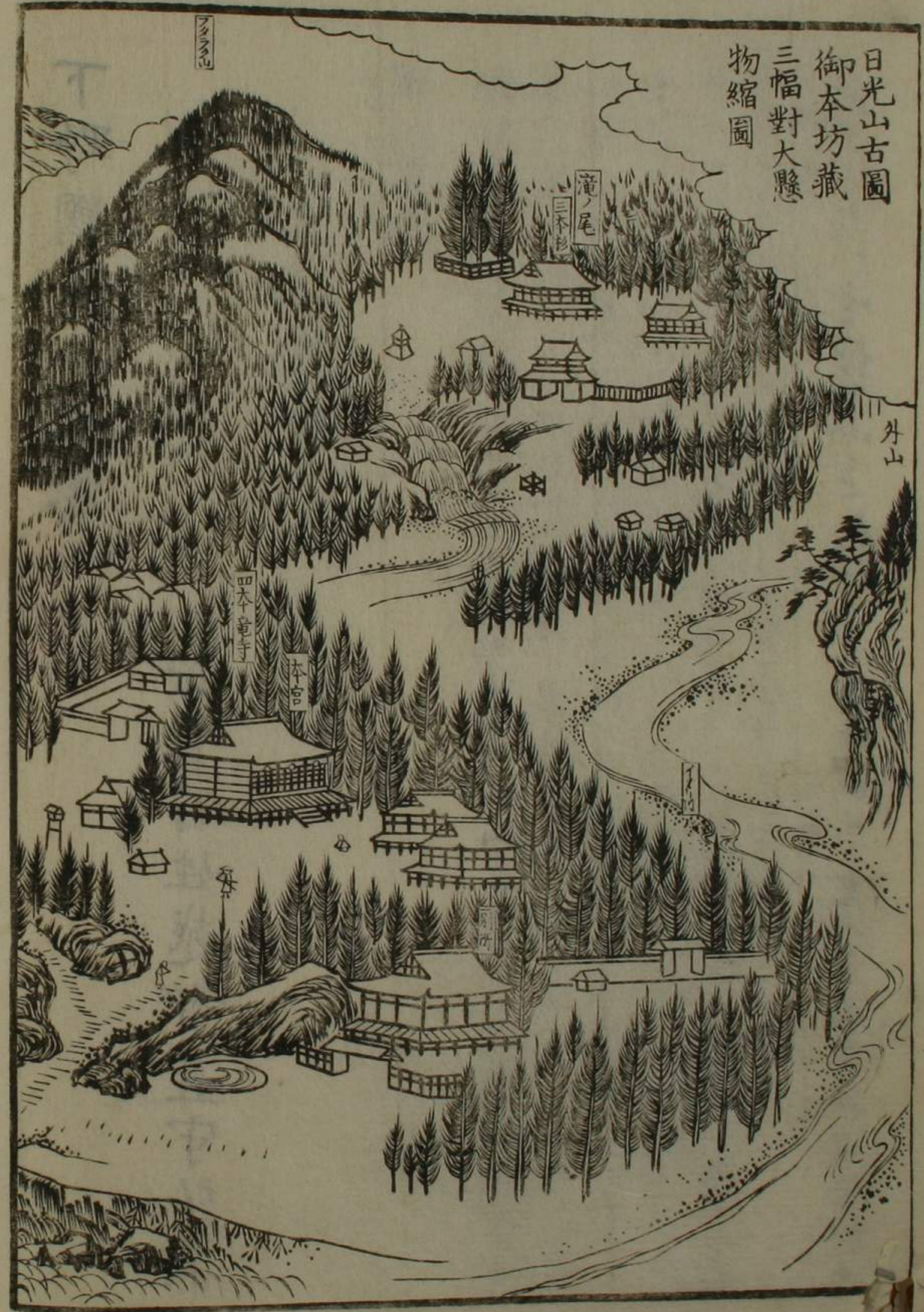


日光山古圖
御本坊藏
三幅對大懸
物縮圖



全十一

梯本朝目人麻呂

ぬい玉の黒髪山の山着ふ少高ありましますくそあも

堀川百首

藤原公實

題五月雨とあり

旅人かきい着乃益や朽ぬらん黒髪山の山着たまの次

全

源信頼

題雪とあり

ぬい玉の黒髪山小雲かほり名もつらうらやものまて高なる

全

隆源法師

題山とあり

ぬい玉の黒髪山の山着い雪もつらうらや名もつらやん舞

新千載

正三位行長

色もぬ黒髪山の山着うらや名もつらうらや

新後拾遺

後三位頼政

家集あり

牙はくしおむらむこぞそ遠うらぬ黒髪山小雲かほり名もつら

夫木雜

西行上人

題老人見花とあり

たあつちりあつちり思ふ思ふ山う花はよけり

歌枕名寄

藤原清輔

家集あり

香衣と子世しあはぬとぬい玉の黒髪山山色もつらうら

新和歌集

仙風法師

雪のまきそぬい玉乃黒髪山名もつらうら

田園雜記

聖護院道典准后の紀行あり

子あふく方とこととあまはも黒髪山も雪かすうら

全

日ぬけて雪のつゆの毛にかいふれや黒髪山の山着けり

黄葉集

鳥丸大納言光廣卿の家集あり

手経くも黒髪山の山着けりうらぬもの名もつらうら

全

時をぬい玉の山着けり夏はく思ふ山小の山着けり雪

静舎集

藤原守万伎の家集あり

ををわらうも黒髪山の山着けりあを雪子を雪かすうら

うけらう花

橘千蔭の家集あり

雪を免子も黒髪山の山着けりうらぬもの名もつらうら

名所今歌集

倭文子

雪うけの黒髪山の山着けりうらぬもの名もつらうら

全
かゝる山姫の朝日さあけさせし
縣居歌集 賀茂真淵家集より

全
下野や神の志つめ
静舎集 名所今歌集より

全
下野やかたけのあけく
阿豆麻歌 橘枝直家集 草野集より

全
夏まきそ梅さくねる
橘枝直家集 草野集より

全
かゝる山あけ朝日あけのあけし
名所今歌集より

全
朝霞やかたけふさく
名所今歌集より

全
世ふれし山神と
名所今歌集より

全
ひはらのみ
草野集 橘枝直 家集より載り

全
下野やかたけのあけく
下野歌枕 觀山法師

全
あけく
下野歌枕 觀山法師

全
かゝる山あけ
ト部有盈 勝田諸持

全
あけく
三善真袖

全
あけく
清原高興

全 柴子世をさす河のふ数とて三木の杉よまじり逢えん

下野歌枕 藤原春村

瀬の尾乃家吹ぬるも山風も岩もあはれりてきりしめや

全 源 守村

ぬきまゝに人あはれしを瀬のをり瀬の白玉ちよとてちよとて

全 平梅好

滝の尾れ瀬の志系長き世成る魚もいづせはけりてきり

全 源 芳規

ちりそめしこころいりちよきちよ玉と敷たり瀬の尾乃玉

全 源 芳規

ふさぎもてなつぬ杉と三柱とあはけははるかこのりなま

ヤマスケハシ 山菅橋

日光山の入口ふあり、今ハ神橋と唱やちり其下の流れハ大谷川といふ、
中禪寺の湖より落て末いきぬ川ハ入なり、ハ雲御抄ハ下野の山菅橋
といふ、枕草子ハ山菅の橋名をききしるあり、とあり、また橋長サ十四
間許あり、朱塗ナリ、委しハ佛寺部日光山の条ふあり、
懷中抄
老の世まじりてはけりてははれあり、福つよりわたりて山菅の橋

田國雜記

法の水はねえ深く暮れはけりてははれあり、山菅の橋

黄葉集

久しきのや井もまじりこれやあの間うりあり、山菅の橋

為景卿紀行

ひしきまじり雲井のころとてやまじり人ふとてははれあり、山菅の橋

漫吟集

古きとて人のころはまじりあり、山菅の橋

下野歌枕

君の世のまじりあり、山菅の橋ハ巖を根とてははれあり

權大僧都慈帆

けりくひしおわかきつおくまの白くれまの山菅の橋
おくまの月清原高保の光りもわかきつあじうらう山菅の橋

伊吹山 里

都賀郡吹上村小あで朽木駅より西北の方まで今道一里餘あり其所より善應寺と云真言宗の古寺ありて山号を則伊吹山と号せりれども境内小觀音堂として是は古標茅原にありてをこけらうりてありて其あよりて艾草ありて生れ葉の形尋常より大きくて葉を絶て尖れり尤功能他小異なりて甲田貞丈が徐嘯隨筆に記しあり伊吹山の事ハ能因り坤元儀小此山ハ美濃と近江との境なる山ありて下野ありと記し顯昭の袖中抄茅二の卷小之あり契沖阿闍梨の勝地吐懷編に下野ありと記し

六帖

なみなりといまの山なりともなやと思はれ下野ありて
はらふあやいあいの山なりともなやと思ひよあはれ
まきしあといまの山なりともなやと思はれ下野ありて

此歌夫木抄ハ山吹より入るるはまきしあといまの山なりともなやと思はれ下野ありて山吹れをとりて次下に定家卿も色あはれくうらふ色をとまはれよまやハ山吹の花もあり契沖云是ハ上の歌をとりてよ給ふ意や拾遺愚草小ハまきしあといまの山なりともなやと思はれ下野ありて山吹の頃よかくいまはむねハ是ハ此本を正義とまきしあといまの山なりともなやと思はれ下野ありて

堀川百首 藤原仲實

秋まといまの山ハ山ありてはらふあやいあいの山なりともなやと思はれ下野ありて
枕草子 清少納言ハ下野ありてはらふあやいあいの山なりともなやと思はれ下野ありて
れあひたよからぬ山の庄せもまきしあといまの山なりともなやと思はれ下野ありて

後拾遺 藤原實方

かくもたふえやいし草のけりも草さしと志しをかゆる思ひを

新古今戀一 和泉式部

ふりさすこのやいし草のけりも草さしと志しをかゆる思ひを

同戀二 中宮大夫家房 攝政大臣家歌合の歌あり

いづれもいづれもたの峰ふれりし絶せぬ思ひあはれむ

建保歌合 家隆卿

色もたふえやいし草のけりも草さしと志しをかゆる思ひを

元仁元年禅林寺殿七百首 寄嶺戀

待ゆをといふりし草のけりも草さしと志しをかゆる思ひを

新勅撰戀二 藤原頼氏

あつもさすもゆるいし草のけりも草さしと志しをかゆる思ひを

續後撰秋下 麻縁法師

いづれもいづれもたの峰ふれりし絶せぬ思ひあはれむ

續古今戀四 中務卿親王

いづれもいづれもたの峰ふれりし絶せぬ思ひあはれむ

新後撰戀二 大宰權帥為經

よのよもいづれもたの峰ふれりし絶せぬ思ひあはれむ

新拾遺夏 衣笠内大臣

あつもさすもゆるいし草のけりも草さしと志しをかゆる思ひを

新後拾遺戀四大納言通具

さしもたふえやいし草のけりも草さしと志しをかゆる思ひを

歌枕名寄 清少納言

いづれもいづれもたの峰ふれりし絶せぬ思ひあはれむ

晚花集 下河邊長流家集

いづれもいづれもたの峰ふれりし絶せぬ思ひあはれむ

紅塵集 上田秋成

いづれもいづれもたの峰ふれりし絶せぬ思ひあはれむ

下野歌枕 藤原春村

あつもさすもゆるいし草のけりも草さしと志しをかゆる思ひを

今 越智守弘父のけりも草さしと志しをかゆる思ひを

全

滋野三宜

月やるませしうき海いそろろてやをいそりの出ありの風
全皆冠歌伊吹山さしもくまよそくへん
いふとわおりのそはてー菜のおやよやかくゆせのそよ

九

標茅原

レメチカハラ

都賀郡河原田村小あり、伊吹山より十餘町東の方より今迄も標茅原と訛
行々契沖の勝地吐懷編より標茅原ハ伊吹山の裾野ありと記しあり
則此原中に艾草ありと生じさると宇都宮より日光山ありと標茅原と
唱(来)る所ありて、さぬくの説どもよめまこと論もさるべし但し日光山の方より
艾草ありて、是を摘てひく物あり何物あり調り喰ふ味は甘美
みして苦汁ありて、深山に生るゆゑありとて、水戸のとき原氏の藪
桂偶記より伊吹艾の論ハ、伊吹山標茅原ハとも日光山の奥より太郎嶽
よつらちる山ありと云ハ、妄説なり原氏より考(得)て日光山名所記と

云小冊を見て、是と究めしものありし

六帖

夫木抄

下町や志あつる原乃さしそくさ其の思ひよをや焼らむ

新六帖

衣笠内大臣

草さるし志あつる原ハ霽れて身あらましれこのたはほし

夫木抄

先俊朝臣

下町や志あつる原のそはれしかなふやゆる思ひそ

文治百首

俊成卿

夫木

この免し志あつる原此下原志ふわをてよと経ねるれ

散木集

源俊頼朝臣家集

秋くれし志あつる原よき記をむら秋のそはれそよさるる鳴あわ

新古今秋教

此歌ハ清水觀音の歌ありて、観音の歌ハ此標茅原の觀音あり

新古今秋教 此歌ハ清水觀音の歌ありて、観音の歌ハ此標茅原の觀音あり

新千載雜

いふれし志あつる原此冬そのさしそくさ其の思ひよをや焼らむ

いふれし志あつる原此冬そのさしそくさ其の思ひよをや焼らむ

下野國誌二

鯉島、大河島、萩島、高島、卒嶋、島田等の八ヶ村をさして、茂呂の八島ありて、
以て附會の説として論ずるべし。

清輔袋草子卷三、源經兼下野守ニテ在國之時、或者
便書ヲ持テ向國府、不叶之間、無術之由ナンドイヒテ、ハカ、レ
キ事モセス、冷然トシテ出テ一、二町許行テ、更ニヨビカヘシケレバ、不
便ナリトテ、可然物ナド可賜カト思テ、ナマレヒニ歸來ルニ經兼、
云アレ見タマヘムロノヤシマハ是ナリ、都ニテ人ニカタリタマヘト云、
彌、
腹立氣有テ出、此事十訓抄卷二よしとて、少しもうたは、こゝろあり、是則ち
室の八島ハ國府の近邊ありと云證あり。
平治物語卷二、平治元年少納言信西事小坐して、
其子十餘人國々へ配流乃、民部卿成範下野國
みづて我ももむべから。室八島と見やり給へば、やり心げそこのが
ア、折る感涙とめ、さくちもれ、い、あ、く、く、ぞ聞えたる。

あ、こ、ち、は、な、り、た、る、も、の、を、下、野、や、室、の、や、ま、は、経、の、み、い、ハ

此歌續詞花集に載て、それハ東路の室乃ヤ一、ゆ、ま、ゆ、め、
成範卿ハ正二位中納言、少納言通憲男より、遠流の事ハ公卿補任、も、思、管
抄、い、ま、さ、り、平家物語ハ、櫻町中納言成範卿と記、さ、り、さ、り、月詔和歌集
ハ、成範卿なげやけのこ、ま、り、ま、り、東の方へ、さ、り、ま、り、道、ま、霞、ま、り、
日を強つ都ハ、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、
ま、り、清輔朝臣の家集ハ、成範卿おなげのこ、ま、り、ま、り、遠くま、り、ま、り、ま、り、
ま、り、あ、り、ま、り、都、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、
ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、
返一成範卿
ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、
ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、

義経記卷二 義経陸奥國より
のゆ、ま、り、ま、り、 宇都宮大明神を、ま、り、ま、り、ま、り、
のや、一、ゆ、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、ま、り、
に見て云、

親鸞聖人行録下野國に御經廻ありて室のやうまを
いふ所は、輻く御住居ありまゝとあり、御旧跡の所は、室明神
乃東より西なり。思川といふ渡りあり、それより東に越え
て、花見岡といふ小山あり、是上人御幽居の跡なり、此所を大光
寺村といふ、近隣に大なる池あり、上人常は愛をせ給へり、とて今
よのり云々、

烏丸光廣卿日光山紀行も、富田を通り、朽木と云所を過て、
音ふまゝく室のやうまをいふ事あり、云々とあり、
右の書ども、室のやうま、今の地なりと云明證なり、かくまで甚しく
いふ立上りの附會り説あり、

狭衣物語卷一、中將の君あり、室のやうまの後、宮の

源氏宮寺

こゝよりくまゝなり給へり云々、

宗久都の裏ふいとちりの世もあらまゝなごなり
うさむめ、けまゝいひあり、室れやうまをい
まゝいひて云々、

宗長東路裏に壬生といふ所ふゆくと云、室れやうま近き
所も、亭主中務少輔綱房の終つれといふあり見
まゝあり、誠ふとちうまをいひ、いひまゝ折
秋ありいひてありありて、

東路の室れやうまの秋もいひまゝあり、
このやう紹巴下紐卷にも室のやうま云々あり、

慈元抄卷上

昔有馬王子零之れりて。下野國より下り給。其國より
五万長者とて富人あり。其より立寄せ給て奉公を爲さし由
を宣ふ。長者奉置或時酒宴の半ふ巡の舞ありて。其舞をり。
彼若殿原も舞ありと長者といふ程ハ。王子やうて立く
歌をよみて給ふ。

いねむり川を以柳ゆくぬに流ををしりその根はうせ
と詠して舞給ふ程ハ。長者只人よはりて座鋪を立く。
御手を引て上坐ふおし奉りて終とねん。其頃長者獨此
娘を持より。うねてハ常陸の國司ふ参るをきり。約束有

くれハ彼王子忍逢玉ひて程おく懐妊有くれハ國司より
催促有々程と。娘ハ早死しりて。喪葬の儀式をありて
野邊に送り。棺ふいつと云魚を入て焼て煙を立彼魚ハ
焼白い人を焼し似くれハおれその心をよめ給。

あつち路の言のやまにまきり誰のいりておれ
このりりややくとあり。そのりりてこのりといふとねん。
是歌故王子幸ふ逢玉ふ云々。

按ふ右の王子のよと給ふと云歌ハ日本書紀顯宗卷ふ。

いふいり川を以柳をゆくぬに流ををしりその根はうせ
とありて。則ち顯宗天皇の弘計王と聞えさせ給ひ。時ハ播磨國縮
見屯倉首の家は仕へて新室歌宴をよめ給ひ。歌終り。その王を

万代集戀三 衣笠内大臣 百首歌奉り多時寄煙戀とよみとあり

才に何ぞ思ひをわきとらふや 室のや 満ち煙こころ

金槻集 鎌倉右大臣實朝公家集

あつしきいさひ くらあつ煙つ室乃や ませむのしゆえ

續詞花集雜中藤原成範朝臣

我の光よ何ぞとらふのを 東海の家れや 満ち絶ぬ思ひハ

新和歌集春藤原時朝 笠間長門守

煙つ室れや 満ちちの足行い 糸をむらや 雲をむらむ

全雜 藤原基綱女

今はたに煙をわきとらふや 室のや ませむのしゆえ

全 藤原親朝 塩谷周防守

々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

全 藤原景綱 宇都宮下野守

こころに煙や 室のや 満ちちの神のちのひあふらむ

全 源行宗

むらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

全 安部資氏

こころに煙や 室のや 満ちちの煙をわきとらふ

全 清原成朝

よのこに思ひの煙をわきとらふや 室のや 満ちちの煙をわきとらふ

法性寺内大臣家歌合攝津

こころに煙や 室のや 満ちちの煙をわきとらふ

千五百番歌合 三宮

よのこに思ひの煙をわきとらふや 室のや 満ちちの煙をわきとらふ

歌枕名寄 永縁僧正

眞山よ々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

漫吟集

故き火の煙をこむら 紗のや 室のや ませむのしゆえ

全

東照の秋乃焼 糸をわきとらふや 室のや 満ちちの煙をわきとらふ

全

心をやちと室れや 室のや 満ちちの煙をわきとらふ

宗長東路裏

東路の室は葉の浦の秋の色はそれより夕煙を

黄葉集

室のやま見よすりりたる雨のやうなれいとあり

雨雲はそれより夕煙を

為景卿紀行

煙の煙やにまはれ民の寔は室は煙を

下野歌枕

觀山法師

名もそとけ室はやまは葉の浦の秋の色はそれより夕煙を

全

久米千壽

立の月を室のやまは葉の浦の秋の色はそれより夕煙を

全

深見三橋

那くふり室はやまは葉の浦の秋の色はそれより夕煙を

全

源綾彦

一のけりり室はやまは葉の浦の秋の色はそれより夕煙を

噫杜 シムギノモリ

右小同く、國府村の北乃方より惣社明神と室の八島との間にある

森をのり

朝忠卿家集

本院の將曹をけりてそとけをそとけり

下野歌枕 藤原千條

全

源忠寛

志の葉の葉の本はまはれ葉の葉をまはれ葉の葉を

全

紀幹有

いよふ葉の葉はまはれ葉の葉をまはれ葉の葉を

全

妙知尼

志の葉の葉の本はまはれ葉の葉をまはれ葉の葉を

全

守風法師

立姿をねんそりてまはれ葉の葉をまはれ葉の葉を

全

守風法師

よふれいそりてまはれ葉の葉をまはれ葉の葉を

三毛山 驛

都賀郡あり、兵部式より三鴨驛とらるる此所あり、和名抄より山頂より七八町許の登りあり、東北面より下津原村と云、西面より西浦村、南面より太田和村と云、三ヶ村入會の地あり、古より三鴨郷あり、さう後より三香保崎とあるも此所より、ミカホハミカモの訛り、

万葉集十四東歌下野國相聞往來歌

志もつらめもあはれおのこをさへせむさうりこあらんけりもむ
下毛 野 三毛 小楢 如真細 子等 誰氣 將持

契沖の代匠記ふ、誰か男をさうりむと云意といひ、或人の誰か氣う
とむむ、我氣かきとていと云意と云り、小楢の如きり、小女寺の意
あり、契沖のいひ、如くあり、さう相聞と云、相思心と互に
告間ゆきと云り、後世より戀と云ふ、されど万葉集より、
親子兄弟の相さうりむ歌をも載てこや廣し。

下野歌枕、藤原守舍
さうりむと云るは世の古きや、さうりむのさうりむは、橋の架

全 藤原春村
さうりむと云るは世の古きや、さうりむのさうりむは、橋の架

全 橋守近
水鳥のさうりむの山、さうりむの山、さうりむの山、さうりむの山

全 清原高保
我富乃橋の架、さうりむの山、さうりむの山、さうりむの山

全 源守村
みは鳥のさうりむの山、さうりむの山、さうりむの山、さうりむの山

全 藤原元成
源のさうりむの山、さうりむの山、さうりむの山、さうりむの山

全 藤原元成
源のさうりむの山、さうりむの山、さうりむの山、さうりむの山

三香保崎 関

同所ありハ雲御抄子、三香保崎、慈覺大師誕生の地とあり、今下津原
 大師の産湯あび給ふ跡とて鹽窪と云所あり、鳥光廣卿の日光山紀行
 にも記さるり、さて此山の北より西へ関川と云流し、河も末ハ鯉名沼とて南北
 三十町東西十五町許の沼、入江尻の流れハ安蘊川と落るなり、

新千載旅 蓮生法師 万代集より新和歌集より 藤原春村
 石もまぬあその川もよけられて、藤原の崎もくやとまらん
下野歌枕 藤原春村

いよよひのうのけの崎をわらわの道にまよふことしむ
安部光枝

我もまぬあその川のよけられて、藤原の崎もくやとまらん
源正名

桜もくやとまらんあその川のよけられて、藤原の崎もくやとまらん
三善真袖

あそこの川もよけられて、藤原の崎もくやとまらん
僧正慈観

草枕日を経ていよよひのうのけの崎をわらわの道にまよふことしむ
僧正慈観

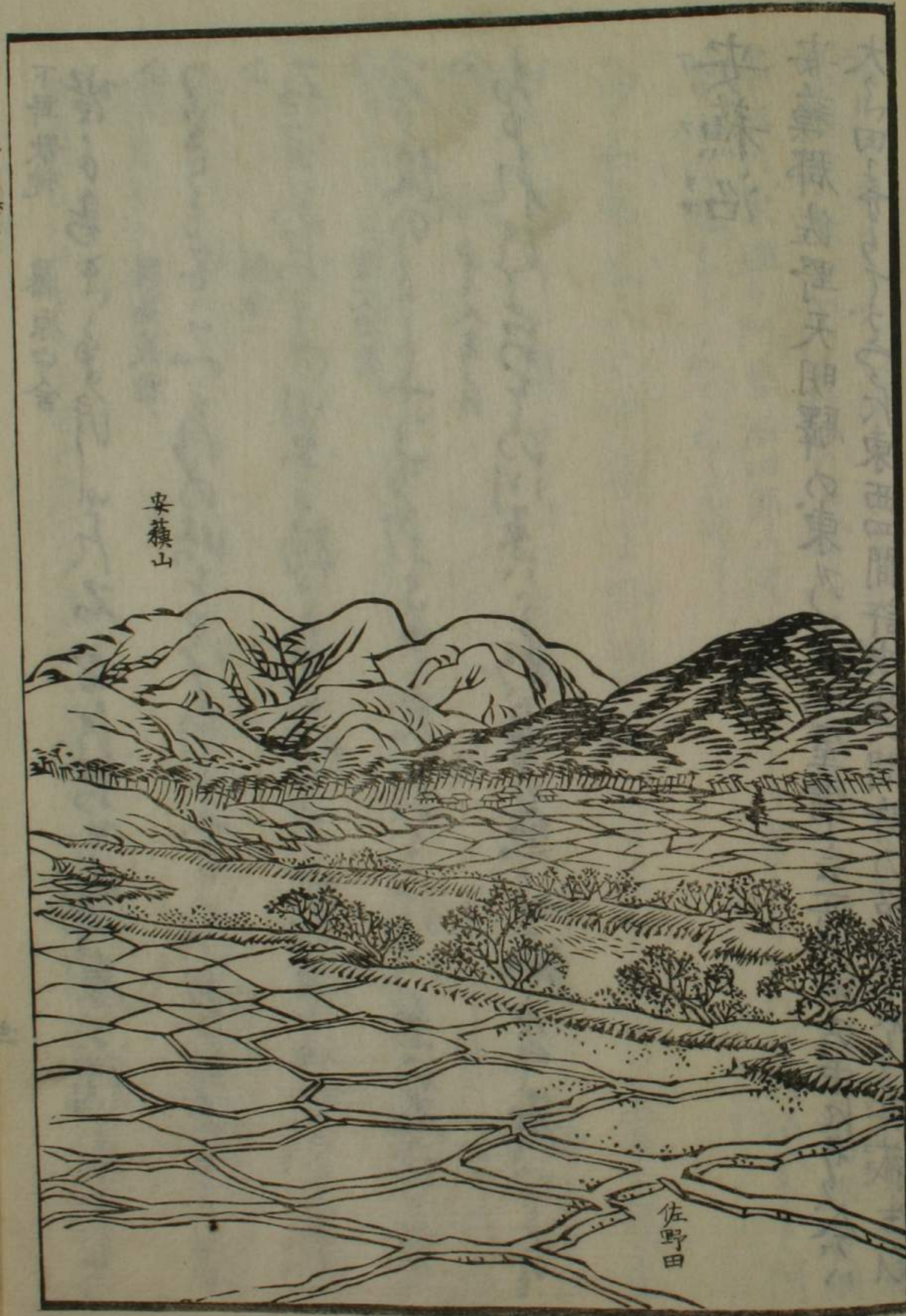
安蘊川原

安蘊郡佐野天明驛の西を流る川なり、往古、天明の東を流る川なり、
 水上ハ同郡秋山と云所より出て末ハ佐野中川ともよ、利根川と入なり、

万葉集十四東歌下野國相聞往来歌
 志もつらぬあその川もよけられて、藤原の崎もくやとまらん
頼政卿家集 河邊千鳥とあり

あそこの川もよけられて、藤原の崎もくやとまらん
名所今歌集 藤原磯足 東歌とあり

石もまぬあその川もよけられて、藤原の崎もくやとまらん
橋千蔭 千岡下野旅立ち頃おひつりていよよひとあり
 下野の河それ川原のさきへ石もまぬあその川もよけられて、藤原の崎もくやとまらん



安藤山

佐野田

從安藤川原眺望三毛毘山之圖



三毛毘山

三香保關

安藤川

下野歌枕 藤原守吉

菅の鳥ささるるの原にまたるまはあすの川原よ我がまよふ

岡島美雅

つらきもささるるの原のほととぎすあすの川原をさるる

源惟一

石守あすの川原よあすの原のほととぎす

倭文刀自

あすの原のほととぎすあすの原のほととぎす

よまの人まよふ

あすの原のほととぎすあすの原のほととぎす

安蕪沼

安蕪郡佐野天明驛の東乃入口小屋街と云所の田の中あり、今ハ大田ありて、つらに東西四間許南北六間許の沼と云れり、真菰生ひ

茂りて水いそをわづらひたり、されば世俗ハ真菰の池と云呼ぶなり、其東の方三町許ハ浅沼村あり、此所ハ古城跡ありて、往昔阿曾沼四郎廣綱居住ハ東鑑ハ阿曾沼四郎ハ浅沼四郎と書り、されば浅沼ハもと阿曾沼の訛と云ふなり、

沙石集卷八ハ、中頃下野國ニ阿曾沼ト云所ニ常ニ殺生ヲコノミコトニ鷹ヲツカフ俗有ケリ、アル時鷹狩ノ歸サマニ鴛ノ雄ヲツトリテ、餌袋ニ入テ歸リヌ、其夜ノ夢ニ、装束尋常ナル女房、姿カタチヨロシキガ、恨フカキ氣色ニテ、サメトト打ナキテ、イカニウタテク、ワラハガ夫ヲバコロサセ給ヘルトイフ、サルコトコソ候ハ子トイヘバ、タシカニ今日メシリテ候ヘシモノヲト云、猶カタク論ズレバ、

日暮レバサソヒシモノヲアソ沼ノマコモ隠レノ獨寝ゾウキト打ナカメ

テフツ、トタツチ見レバ、駕ノメドリナリ。打オドロキテアハレニオモ
フホドニ朝ニ見レバ、昨ノ雄トハシチクヒアセテ雌ノ死セル
アリケル。是ヲ見テ發心シ出家シテ、ヤガテ遁世ノ門ニイ
リ侍リケルトナン。カタリ傳テ侍ルアレナリケル發心ノ因縁也。

さて此因縁の物語ハ、著聞集より載テ陸奥國赤沼のこゝに、殺生人ハ田村の
住人右馬允と記し、著聞集ハ、橘成季、撰り、建長六年と有り、此沙石集、無
住法師の撰り、弘安二年と有り、同項の書あり、いふもきり、事なり。

漫吟集哀傷

つげねの山のやちあそ沼のまをくるとおもふをくれ

下野歌枕 源音鷹

ひもりのをくるとおもふあそ沼のまをくるとおもふをくれ

全 下野歌枕 源音鷹

云雲のまをくるとおもふあそ沼のまをくるとおもふをくれ

全 守川捨魚

あそ沼のまをくるとおもふあそ沼のまをくるとおもふをくれ

全 源正照

あそ沼のまをくるとおもふあそ沼のまをくるとおもふをくれ

安蘓山

安蘓郡あり、是とさく山ハ、あそ、佐野、庄より北より、まき、山と、まて
安蘓山と唱ふなり、甲斐國の山を甲斐嶺といふ、陸奥國の信
夫郡の山を信夫山、安積郡の山を安積山といふ如し。

万葉集十四東歌相聞

かろけあそそのまをくるとおもふあそ沼のまをくるとおもふをくれ

全 譬喩歌

かろけあそそのまをくるとおもふあそ沼のまをくるとおもふをくれ

吾友安部光枝云、右の歌、かゝつてわづらひあかぬ、安藤山ハ全ク下野ナリ、最モ安藤郡ハ上野ニ隣リ地あれハ大ニにわづらひあかぬ、安藤郡ハもと山畑ニテ麻をたぐく作る地あり、下野ハ麻を作ル國ナレバ、安藤郡より出るを最一トシ、安藤のすそをひらきしるも、真麻群トシ、安藤トシ、麻より出ル名ナシ、誠ニさしある、青麻トアナソ、績麻をウミンガト今もいふあり、同郡淺沼ハ、安藤沼ナリ、和名抄ニ、同郡の郷名ハ麻績あり、今天明驛の北の、存存然、上野風土記ト云書、赤城の阿羅山の、上野名跡考ト云、舟尾山ト云、舟尾山ト云、箕輪軍記ト云、北ハ安藤山相馬の麓、秋井の原ト云、上野風土記、安藤麻楚村、上野名跡考、安藤末曾村ト村名の条不舉、六万葉集の歌を、違ヘ、僻事あり、古ハ引、上野風土記、名跡考ト云、近世書、古ハの風土記の類ハ、主計式、下野國中男作物麻一百五斤ト云、今も藤沼麻ト云、世の志、所ナリ、

新六帖 為家卿 夫木

我思ハあそ山かのまつら夏野を藤

漫吟集

あそ山まつらの陰、あそ山、神のり、あそ山

下野歌枕

あそ山、村、山、の里

全 与祢子

あそ山、あそ山、あそ山

全 清原岑雄

あそ山、あそ山、あそ山

全 星野龍海

あそ山、あそ山、あそ山

全 藤原鞠兄

あそ山、あそ山、あそ山

夫木
あそ山の
よりあそ山
川のほとり
あそ山
あそ山

佐野 中川 船橋 田

安藝郡佐野庄を云あり佐野中川と云ハ渡瀬川のことあり同郡足尾山の渡瀬村より出るゆゑに世俗ハ然呼ぶあり船橋今の高橋村の邊りありと云あり

万葉集十四東歌相聞往來歌

わづらひ佐野の舟橋よりそりてはれはまじしと云あり

全 今 折 吾 將 待 今年 不來

右の歌どもわづらひ佐野の舟橋よりそりてはれはまじしと云あり

然るも万葉集よりわづらひ佐野の舟橋よりそりてはれはまじしと云あり

上下乃國境ある佐野中川よりけ渡しと云あり大うらまのつらみと云あり

口尻文あり

下野ト上野ノ境ニアルヲ佐野ノ中川ト云今桐生川ト云又タ渡瀬川トモ云是ハ下野ノ足尾山ヨリ出テ大間々ト桐生トノ間ヲ流ル

佐野ナリ下上ニ兩國ノ中川ニアラス云とあり是ハ大間々ト桐生との間を流る川をいひて上野と下野との境ある川をいふとあり

此のいふとありて聞え難し按ふは是ハ強テ群馬郡の佐野を取とせんともあり今下野は属せる佐野とせんともあり

上古ハ同一モ野國ナリ然らば今こそ下野とあれ昔ハ上野とせんともあり

地理よきこととせん今こそ下野とあれ昔ハ上野とせんともあり

下野彼所ハ上野とて微細ニ境を立て心をつけてよとせんとの

古書ハ正しく其所とせん今こそ下野とあれ昔ハ上野とせんともあり

下野圖誌二

廿三

東遊行囊抄卷二十。佐野渡舟渡也。是ハ利根川一流也。古歌ニ佐野ノ中川トヨミシハ此川由也。此川ヲ以テ上野下野ノ境トス。

千載意四 源仲正

佐野ノ中川流々として流るる所ハ渡ありたり

新千載意五 為兼卿

つわりなき佐野の中川そのまじき急流なる所ハ流るる所

夫木抄 隆博卿

五月月角いづく日あまると流るる所ハ佐野の中川ありたり

或人ノ曰。今上野ノ中ニ安中ノ邊ニ佐野ト云所アレド古歌ニヨミシハ

此所也。此所古へ上下ノ國境ナレバ渡ニツイテ上野トヨムコト妨ナシ。

彼佐野町ノ西卅余町ニ船橋跡アル昔ハ其邊ヲ船橋里ト云キ。

夫木抄 本々 祐舉 いづれも佐野の中道を尋ねりて船橋里

以上行囊抄ふ記一とあり

船橋里今高橋村と詠りて足利郡ニ属シ天明駅より一里許あり

田國雜記ハ文明六年

田國雜記よ、かゝるいづれも佐野の中道を尋ねりて船橋里

此歌日光山の前件ニあれバ下野の佐野とて給へり

同書ニ再び三月二日と信川青柳とある所の庄館林と云ふ野あり

過て佐野よりあり

つゞきのあやをい遠く海まで霞のぼる所の船

ともありされバ道興准后ハ下野と心得給ひてあり

宗長東路の裏ニ十六日佐野へ歸り行らむと太平と云山寺あり般若

寺とて二宿して連歌あり云明る所の船橋を見よと云

おもしろい今も昔も名をきくは後りてはの船

是も今も佐野よりありて此所ハ万葉ニ佐野田の稻とあり

り云ふと記しあり

蒲生氏郷紀行ニ佐野の船橋と云わ里人の出侍りて尋とをたれハ昔人を戀々人のしるしあり有様と云ふのこゝ語を聞ておれはなほほと云

下野國誌ニ

氏郷紀行ハ天正廿五年

東路のつゞき永正六年

されやらの佐郎の船格もたててよしく人らあわれめ
とよくこもり渡りつゝ上野國云ことわり、

堀川百首 源師頼 題不逢意とあり

いよきくたゝ路よすのこもりあはれはるはるの船

全 藤原顯季 題橋とあり

東路のさの船格もたててよしく人らあわれめ

永久百首 源忠房 題不見書意とあり

いよせはるの船格もたててよしく人らあわれめ

後撰意二 源等朝臣

東路の佐郎の船格もたててよしく人らあわれめ

詞花雜上 左大弁俊雅母

夕雲子巾のさの船格もたててよしく人らあわれめ

續古今夏 祐威法師

五月あふささの船格もたててよしく人らあわれめ

全意 家隆卿

東路の佐郎の船格もたててよしく人らあわれめ

續拾遺意三 津守國助

さのさの佐郎の船格もたててよしく人らあわれめ

新後拾遺秋 藤原信實朝臣

道遠さの船格もたててよしく人らあわれめ

新續古今雜 前大納言為家卿

河原さの船格もたててよしく人らあわれめ

夫木抄 為家卿

今より川原のさの船格もたててよしく人らあわれめ

全 源仲正

志はるさの船格もたててよしく人らあわれめ

月清集 後京極攝政

東路のさの船格もたててよしく人らあわれめ

拾遺愚草 定家卿の家集あり

志はるさの船格もたててよしく人らあわれめ

六帖 喜撰法師 夫木も上のうも六帖も夫木もあり

下野や しのぶの心ろくちりちり人なるれんたる

たつと枝もさるるさるる心はひねるおんさるる心はひねるさるる

散木集 恨躬恥運雜歌百首の中より

下野歌枕 大江千穎 大定と座なる新のまに瓜をさるるの心ろく井は月

今 池田市万侶 今 源弥繼

二子山さるる人の心ろく今さるる月の心ろく

寒川

夫木抄の
とて載せし
とて抄し
とて見ゆ

寒川郡はあり水上六都賀郡河原田村の標茅原より涌出て、初木驛
の西裏を流し寒川郡寒川村より出流澤の流と落合ひ末は佐野中川
ともよ利根川に入なり、あふ中に此川の寒水ある故に寒川の名、負
あり、此邊りを寒川郡と呼びて、あつて郡名あり、あり、世俗は
巴波川とも云あり、いと川上を云名を今、然呼ぶなり、とて巴波

懐中抄 躬恒家集の唐衣ぬ針川あり

下野歌枕 源春棟 唐衣ぬ針川の心ろく

今 藤原廣善 寒川やゆきもさるる五月角を夏の水溜の水を流し

今 尾崎長樹 寒川をさるる心ろく

今 越智守私母 寒川をさるる心ろく

歌枕名寄 下野歌枕 藤原躬鶴

塩乃やの月舟は清くたされて雲をわが舟にせりさるる

丹治花門

塩乃やの月舟は清くたされて雲をわが舟にせりさるる

坂上橋住

塩乃やの月舟は清くたされて雲をわが舟にせりさるる

高階友馬

塩乃やの月舟は清くたされて雲をわが舟にせりさるる

高階友馬

塩乃やの月舟は清くたされて雲をわが舟にせりさるる

狐川里

塩谷郡あり今ハ喜連川と改むされど猶キツネ川と唱ふなり、
義經記卷二ハあり安達原行方原をうら通りきつ川を

うち過てさげ橋の宿よついで馬をやとめ衣川を渡り宇都宮

大明神をりをぐる云々白川古事考も塩屋郡狐川と記しあり

然るを生實國朝君古河公方義氏朝臣の家を續て天正十八年始て當所を
移住せられた依て喜連川と改むてハ民部式ハ九諸國部内郡里寺名嘉名
を取もてある如くせり文字ハ改しとのあり

夫木抄 為家卿

よよわくふくのうら狐川にけあらんけしとこそまて

漫吟集

里人のよよわく火けもをわらわらちやき狐川にけ

漫吟集

よよわく火けもをわらわらちやき狐川にけ

下野歌枕 丹治花門

よつ川の川を柳夕風よわねをわらわらちやき狐川にけ

雀部春世

よつ川の川を柳夕風よわねをわらわらちやき狐川にけ

權律師常然

全 中つ川の... 山日安良

全 山日安良

全 狐川... 源正名

全 源正名

全 狐川... 玉藻の道

全 玉藻の道

全 玉藻の道... 温泉

那須野 淘汰金 温泉

那須郡太田原の邊より陸奥の國境までを越て那須野原と云あり其西北の方より那須嶽と云山ありて麓に温泉あり其所より殺生石と云毒石あり源翁禪師傳ふ

源翁禪師諱心昭彌空外姓源氏越前國荻村人也初生日空中有聲曰此兒為最尊幼投陸上寺為沙彌性敏秀七歲誦俱舍論十六歲雜染受戒沙獵釋典一千卷十八歲謁峩山峩山者道元和尚弟子也參禪門究旨近衛帝久壽年中一夕宮中之宴管絃及深更殿閣大震燭火滅帝座下有寵妃玉藻前身放光照殿階帝於是猶豫安部易詵ト之曰是玉藻所為也忽化狐逃東國詔三浦友義明

千葉介常胤上総、又廣常、毆其狐於下野國那須野。義明射殺之。爾後百年餘，狐靈為石。世俗曰：殺生石。觸其石，則鳥獸人民皆死。時有僧太徹者，我也。欲止石怪而不能焉。後深草帝寶治年中。

詔源翁曰：往熄此怪。即師到石傍，拈破竈隨機緣。曰：汝既是石靈，何處來？性向何收？題偈曰：

法法塵塵端的底，本來面目未曾藏。現成公案大難事，異類中行任度量。舉拄杖卓一下，石忽破碎。

其夜一女子現謝禮曰：嫗得淨戒，生天言訖，沒自。

此源翁名鳴洛，鄙鎌倉。平時賴以奧州會津利根

川莊為饘粥之資云。

破竈隨機緣云々、祖庭事苑卷二雪竈頌古の条、師居嵩嶽有廟甚靈、殿中唯安一竈、師入廟以杖敲竈、三下、咄此竈、只是泥凡、合成聖後、何來靈、從何出、又打三下、竈頌破墮落、須臾有青衣戴冠設拜云、我此廟竈神、今日蒙師說無生法、今生天中、時來致謝、師曰、是汝本有之性、非吾強言、即再拜而沒、とあり、是此傳の本、考合はる。

下學集小、文安元稔東麓破衲序と記あり

昔西域有斑足王，其夫人惡虐過人，勸王取千人。

之首其後出生支那國為周幽王后其名曰褒姒
滅國惑人死後出生于日本近衛院御宇号玉
藻前傷人無極後化成白狐害人惟多時俗欲驅
之先追走犬以試其射騎白狐知之化而成石飛
禽走獸當其殺氣者莫不立斃故謂之殺生石于
今在下野那須野原也犬追者始于茲矣但聽之
古老之口号雖不知本說且載之而已會
和漢三才圖會地之部六十六
下野國の条

一說云後深草帝建久元年源翁于時四十二
歲偶過那須原有老夫語殺生石之所以源翁退
其靈怪欲救人憂到石邊示偈文在前仍略之其石三裂石
靈去鎌倉平時頼聞源翁驗德以奥州熱鹽邑賜
之於是創建示現寺云按奥州會津盤大山有毒
石觸之禽獸皆死為陰毒所感砒石之類矣源翁
加治石破裂者不可誣也狐變女亦不珍也唯
近衛院侍女玉藻之怪異等實錄所未載也蓋狐

下野の葦野驛より陸奥の白川より街道の西二町許入りあり朽木柳
又道のへた柳より遊行柳と云道乃清水も同所あり此柳のあつ邊を
古道筋ありと云
新古今三題より

道之よ清水なるを柳は志はしとてまよひりけ終

黒川春村
遊行柳考
此の西行上
人此所より
一考證を
これと長
をばに載

西行法師此歌をよまれ所なりと云り安齋隨筆七に此歌の繪を
清水流る所の柳陰に西行の立ちまゝりる躰を繪かく誤りあり此歌は大治
二年の頃鳥羽殿へ御幸をせ給ひて御所の御障子の繪の面白るを
御覧して其時の歌を召して時則清を召して
よませしは十首を一日よみしを召して其十首の中に清水流るる
柳の陰に水ひもど女房をかかむるをよめしは西行記の巻物よみて
ありしが西行をちかむ誤りあり此歌より頃ハいづれ出家せし其上
志はしとて立ちまゝりハ女房の繪あり云西行物語上巻に清水流る柳加
げに旅人の休む所をよめしは詞あり志はしハ此地の歌
よむるは遊行柳といふは謡曲よめしは人よめしことなる初代の
遊行上人ハ藤澤山清浄光寺の傳へ十四代目の大空上人此地を

通るは一時彼柳の精女花一出て上人の濟度を願ひしは此所より日中
の勤行をせしれをば得脱しとて謝して失ぬ是より例とありて代々
乃上人巡國の時ハ必この柳の下に坐り面向せし事今不替らばと云
書あり

藤澤智察覺書ハ人皇百四代 後土御門院の御宇文明三辛卯年遊行十九
世尊皓上人葦野修行あり枯木の柳乃性老翁と化し上人の前より
来り札を受十念を授り草木國土悉皆成佛の文を演説し給彼老翁の
歌

なにも亦も浅む法法のをりまはハ朽木をそむ屋を後よりのもの
上人より

おもひもや家法ののまよひりハ柳の掬ひありては終ありハ
と吟畢て柳の陰にこれのをん云く柳化度のをりしを殘されて建立あり
一西行ハ其木を遊行柳と名つて寺を揚柳寺とすハあり云く

下野風土記 作者不知 元禄元年 近代の遊行上人の歌より
多を登るるを道之れ朽木の柳より上人より

下野の葦野驛より陸奥の白川より街道の西二町許入りあり朽木柳
又道のへけ柳より遊行柳と云道乃清水も同所あり此柳のち邊を
古道筋ありと云
新古今三題より

道之よ清水なるを柳に志はしとてまよひりけ終

黒川春村
遊行柳考
此の西行上
人此所より
一考證を
これに載
るべし

西行法師此歌をよみし所なりと云り安齋隨筆七に此歌の繪を
清水流る所の柳陰に西行の立よりる躰を繪かく誤りあり此歌は大治
二年の頃鳥羽殿へ御幸をせ給ひて御所の御障子の繪の面白るを
御覽して其時の歌を召して時則清を召して
よみしは十首を一日よみし其十首の中に清水流る
柳の陰に水ひもど女房をかかむをよみしは西行記の巻物よみ
しありは西行をよみし誤りあり此歌より頃ハいづれ出家せし其上
志はしとて立よみしハ女房の繪あり云西行物語上巻に清水流る柳に
げは旅人の休む所と云る所をよみし詞あり志はしは此地の歌
よみしは遊行柳といふは謡曲よみし人よみしことなり初代の
遊行上人ハ藤澤山清浄光寺の傳へ十四代目の大空上人此地を

通るは一時彼柳の精女花一出て上人の濟度を願ひしあり此所より日中
の勤行をせしれをよみ得脱しと云り謝して失ぬ是より例と云り代々
乃上人巡國の時ハ此の柳の下より回せし事今不替らばと云り云
書あり

藤澤智察覺書ハ人皇百四代 後土御門院の御宇文明三辛卯年遊行十九
世尊皓上人葦野修行あり枯木の柳乃性老翁と化し上人の前より
来り札を受十念を授り草木國土悉皆成佛の文を演説し給彼老翁の
歌

なにもあり浅む法法のをよみしハ朽木をよみし後よりものあり
上人より

おもひしや家法ののまよひりハ柳の授けありしは終ありハ
と吟畢て柳の陰よりこれの音ん云く柳化度のをよみしと殘されて建立あり
一西行の其木を遊行柳と名つて寺を揚柳寺とすはあり云く

下野風土記 作者不知 近代の遊行上人の歌より
元禄元年 近代の遊行上人の歌より
多をよみしは道之れ朽木の柳より上人より

竹葉集一二月廿六日葦野と云山陰に名木の柳あり是を遊行十九世の上人陸奥巡行一給ひ々々た非常の姿翁と現して渴仰の氣色顯はせし事世に云継て、隱きあはれは尋寄てなると昔の柳は朽果て葉かき垣結廻しとて夫と云く誠は草木國土悉皆成佛の奇瑞眼のありきと云はれし、憑く覺ぐれば、

ひまもらうは秋とくけしはるあはれはあまきくおも

今に秋吹つて了法法の風柳の枝よふそくころころの

片葉の葦とて名あはれはたつてのこころほはあはれはなるとりこころはそくころの里に止宿も云く奥書は享保四年六月五日連阿とあり

遊行紀行下野國葦野の里遊行柳の舊跡とて

あはれ柳とらあはれとてあはれ法のあはれとてあ

くらあはれ葦野の柳あはれ法のあはれとてあはれとて

蒲生氏郷紀行は白川の關を過行原ふ下野よりわねに清く流る川の上は柳ありをいふ尋侍人は是を遊行上人は道志とせし柳のあはれとてけしや新古今は道の清水流る柳と侍りてあはれとて

あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて

下野歌枕 權大僧都賢順

あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて

全 紀幹有

あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて

全 紀俊豊

あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて

全 源顯雄

あはれとてあはれとてあはれとてあはれとてあはれとて

姿川 スカタガハ

都賀郡猪倉山より出て、末は佐野中川と落合ひ、利根川に入たり、
静舎集 壬生てふ所を行子川あり川の名をとくば姿川と云んは云々
都賀にて、く日とあつねよ姿川やつまらけの名よりつら

都賀山 ツカヤマ

都賀郡の山をさして云あり、安蘊郡の山を、安蘊山といふ如し、
濱臣紀行 家集より載らば

うまぐらう松原とて下野や都賀山つまらけをされより

真岡里 マカノサト

芳賀郡より、古名芳賀郷といふ所あり、晒木綿の名所あり、
千種三位有功卿賤の女布をさるる

川の流れももよほせぬと云の里ふららるる布

庚申山

安蘊郡足尾郷赤岩と云所あり、二子山の峰つきなり、日光山より西の方
より七里許あり、黒髪山の南の方より、さて足尾より九十町餘り
行て廿町許登りて、十町餘り下る、此所より銀山より一里のあひぶ
澤つら行て、登ること三里餘りありて、庚申山の胎内竈と云岩窟
に至る、此所より休息して登るなり、奥の院と唱ふ所あり、其所より一里許、
胎内竈といふ石室あり、九廣と十坪許あり、夫より二十間許登りて、左右

小大石より高き五六丈あり、其形彼二玉の如し。是天工にして、絶妙あり。登りて一町餘りありて、臺石と呼ぶものあり、廣き五坪許あり。自然よりて砥の如し、起て四方を眺む。此山中の風景坐ありて、盡くあり。是より下ること二間餘り、其しき險阻ありて、鬼の鬚鬘と稱する所あり。下ること二町餘りありて、自然の石橋あり、其長さ二間餘り、廣き凡五六尺許あり。此橋より少し登りて、自然の石門あり、是を一の門と云ふ。東向く其大さ廿間餘りあり、中函二間許、左右の小竇各々九尺許、門の形ハ琴柱に似たり。是より二町餘り行て、左の幽谷より數十丈峙する大石あり、塔の如くありて、櫓に似たり。叢樹頂は生い茂り、是より奇あり、下ること二町餘りありて、裏見の瀧あり、水流の幅五六尺ありて、高きこと計難し。とて日光山の裏見瀧に似て、其奇ハ彼所を勝り、是より五町餘り登りて、右の方より白き巖五ツあり、文字石と名づく、其高きこと計難し。此石ハ庚申の文字ありと云傳へし、いと、慥多し、登り下り一町餘りありて、石門あり、是を二の門と云ふ。大さ三間許あり、中央の通り九尺許あり、此岩窟を凡一町餘り行て、燈籠の形あり、石あり、凡高き四五丈許あり、覺ゆる登ること數百歩ありて、鐘に似る石あり、見ゆ凡高き二三丈あり、蘿生鬼絲生いて、真ハ庚鐘の如くあり、下ること數百歩ありて、石橋あり、其長さ九十二三間許あり、丘より登りて、其下を見ゆれば、谷深きこと雲を生じ、幾千仞と計り、これハ橋の形ハ恰も虹に似て、雲の榜とも思ふ、づらぬのたゞしあり、さす種々の石ありて、或ハ鶴龜、或ハ釜、或ハ舟、或ハ屏風あり、其形の似るに依りて、名づけし物擧げて、そのいふもあはれ、づれも自然の大石ありて、天造奇構の妙あり、岩穴窟も數所ありて、上世穴居の址ともなげゆるべし、ありて、奥の院と唱ふ、嶺々三窟ありて、屹として高きこと二三丈、嶺として近づくや、ゆるり、其形中ハまろく、左なるは、このころ、右なるは、まろく、づれも規矩を以て作る、如く、口おのくハ九尺許であり、其前ハ猿の形に似る活石三ツ並べり、思ひあり、しや、視ることあり、聴くことあり、言ふことあり、其の歳と見ゆ、彼是を思ひ、あはれ、庚申山とい名つけし、さす、其右の方より登ること數百歩ありて、東のつもと云所あり、眺望のつらあり、夫より下ること四町餘りありて、大石あり、平石と唱ふ、長さ三十間許、高さ一丈餘り、建屏の如し、此石のきれめの間より、下ること八町許ありて、ちりめの胎内竇の東の方より出るあり、是の神境ハ、人衆を避ること遠く、絶險の地あり、昔より希あり、元禄年中より、や、登山するもの、彼是ありと、容易及ぶ、所あり。

下野國誌二

しんやうやうしんやうのまよしんやうせいしんやうしんやうのまよしんやう
やうしんやうしんやうのまよしんやうしんやうのまよしんやうのまよしんやう
まよしんやうしんやうしんやうのまよしんやうのまよしんやうのまよしんやう
て當國の真弓山よあつた僻ぢやいぢやい

下野國誌二之卷終

足利 梅溪田崎明義畫
北越 竹邨遠藤順信書

しんやうやうしんやうのまよしんやうしんやうのまよしんやうのまよしんやう
まよしんやうしんやうしんやうのまよしんやうのまよしんやうのまよしんやう
て當國の真弓山よあつた僻ぢやいぢやい

